



Miho Inaba 著

## Second Language Literacy Practices and Language Learning Outside the Classroom

Multilingual Matters Limited、2018 年発行、187p.

ISBN : 13: 9781788922104

奥村 恵子

### 1. はじめに：著者紹介と本書の執筆経緯

著者の稲葉美穂氏は、2000 年代に早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程を修了したのちヨーロッパに渡り、スウェーデンの大学で日本語教育に従事した。そこで、現地で日本語を学習している多くの学生が、日本語の知識を磨くための新たなリソースを主体的に見つけ出し、楽しみながら利用している様子を目にすることとなる。

ここで挙げられていた教室外活動のリソースとは、その当時から世界中で流行していた日本のマンガやアニメなど、主に日本のポップカルチャーに関連するさまざまな媒体と、近年急激に発展している情報通信技術（Information and Communication Technology: ICT、以下 ICT）による情報などを指している。当時は、まだ一般的に日本語学習の方法を、いわゆる「教室内で教科書を使用して行う学習」に強く依存していた海外の日本語教育の文脈で、学習者が自律的に教室外の日本語活動を行っていたという光景は珍しく映ったという。著者は、この時から、第二言語習得と教室外における目標言語を使用した活動の関係について興味関心が高まったのであり、本書の冒頭でも述べている。

その後、著者はオーストラリアに移り、大学の日本学科において日本語教育実践を続けるとともに、教室外言語学習に関する研究に取り組んだ。オーストラリアは、世界の中でも日本語学習者が多い国として知られている。また、学校教育の中で、学習の手段として ICT を活用することは当然のこととして行われている。もちろん、教室外活動には ICT が広く利用されている。したがって、オーストラリアでもまた、多くの日本語学習者が、マンガやアニメなどをはじめとする日本のポップカルチャーに強い興味関心を抱き、愛好するとともに、目覚ましく発展してきた ICT を駆使して、さまざまな形で日本語に触れているのである。

本書は、学習環境に ICT が当たり前存在するオーストラリアの大学で日本語を学んでいる学生の、「教室外リテラシー活動」を通じた自律学習に関する研究論文を書籍化したものである。

## 2. 本書の概要

本書には、オーストラリアの大学で、専攻、または副専攻として日本語を履修していた大学生による教室内の学習活動と、教室外における日本語リテラシー活動および言語使用の実態調査が、包括的かつ詳細にまとめられている。題目にもあるように、この「リテラシー活動」(literacy Activity)ということばは、この研究のキーワードの一つである。「リテラシー」の定義に関しては、狭義では「読み書き能力」とされているが、ここで扱われているものは読み書きを通じた活動であり、その活動を通して社会で意味交渉を行っている際の状況そのものである。そこで、本書では、社会文化的な側面からさまざまな形式のリテラシー活動が取り上げられている。たとえば、教室内の学習活動から、教室外でインターネットを使用し、情報を受信発信する活動に至るまで幅広く扱われた。

ここでいう教室内の学習活動とは、たとえば、主に教師から与えられた宿題や予習、復習など、大学での日本語授業に関連する課題のことを指している。一方、教室外の活動とは、インターネットのソーシャルネットワーキング上の情報収集や、アニメを日本語で見たり、マンガを日本語で読んだりするような主体的な言語活動のことを指している。これら、教室内と教室外双方の活動について、複数のデータ収集方法を用いた調査が行われ、とりわけ、社会文化的視点から、学習者の動機づけとピアネットワークが日本語学習に与える影響については、学習者のさまざまな具体例を挙げながら詳しく述べられている。

次に、教室内、教室外の双方の文脈における学習の価値、学習動機、具体的な学習活動の内容と、活動が双方に与える影響について分析した結果が示されている。そして、教室内のどのような教育実践が教室外の日本語学習および日本語使用を促進し得るか、また、教室内、教室外のどのような要因が教室外活動を阻害し得るかということについての考察が詳細に示されている。

## 3. 本書の構成と各章の内容

本書は、7つの章によって構成されている。以下、各章の概要と、特筆すべき内容について紹介する。

### 3.1 先行研究

第1章では、本書のイントロダクションとして、研究の背景について述べられている。具体的には、海外の日本語教育の文脈で、ICTの発展が言語学習や文化理解の形態を大きく変化させていることに関する記述である。また、本章では、教室外言語学習の研究には社会文化的な視点が必要であると述べ、その理由について、さまざまな先行研究を挙げながら述べられている。

続いて、第2章では、社会文化的側面から教室外の言語学習について研究された内容の文献が紹介された。たとえば、自律学習、動機づけ、学習ストラテジーなど、第2言語習得における関連トピックの理解を広げるための主な先行研究について概観されている。さらに、第2章では、調査参加者の詳細、データ収集方法が紹介されている。また、本研究

の主な理論的枠組みである「活動理論」についても、本章で概説されている。次に、第3章から6章までを通して、教室外における日本語学習者の第2言語(L2)リテラシー能力向上の方略に関する具体的な調査結果が示されている。

### 3.2 調査参加者とデータ収集方法

調査が行われた大学は、日本語教育が盛んなオーストラリアの中でも特に日本語科目の充実に力を入れており、非常に多くの学生が主専攻、副専攻で日本語科目を履修している。科目のレベルは初級から超上級まで12段階に分かれており、一般的な日本語が学べる総合科目から、通訳・翻訳について学べる専門科目までである。その中でも基本的な初級文法項目の学習を修了し、ある程度自律的に学習することができるようになる中上級(7レベル)の学習者から、超上級(12レベル)の学習者までの15名の学生を対象に調査が行われた。

データ収集に関しては、写真を用いた日記の調査、文書の収集、半構造化インタビュー、インターアクションインタビュー、授業観察という5種類の方法が幅広く取り入れられている。

### 3.3 リサーチクエスチョンおよび調査結果

研究を行う際に立てられたリサーチクエスチョンおよび調査の結果は以下の通りである。

- (1) 参加者は教室外の文脈において目標言語によりどのような言語活動を行っているか。
- (2) そのような活動への参加を促進または阻害する要因は何か。
- (3) 参加者は教室の外でどのようにしてリテラシー活動を行っているか。また、どのようなツールを使用しているか。(p. 6, pp. 9-14)

上記の問いに対する調査結果はそれぞれ以下のような内容である。

(1) 教室外でL2リテラシー活動の機会を拡大するための重要なツールは、主にインターネットであることが示された。ほとんどの参加者は、授業関連の内容と授業に関連しない内容の双方のリテラシー活動に関してインターネットを利用していた。また、インターネットによる活動は、必要な情報を得るためだけでなく、特定の目的を念頭に置いていないときでさえ行われた。インターネットは、言語学習者とオンラインコミュニティを結びつけ、L2におけるリテラシー能力向上のためにさまざまな機会を生み出していたことが明らかになった。特に、ソーシャルネットワーキングサイト(SNS)は、目標言語での自然な相互交渉のための機会を得ることに貢献していた。

授業関連の課題に関しては、ピアアシスタントの活動例がわずかながら文章表現の際に確認された。これには、日本語母語話者による添削、クラスメートや日本語話者の友人からのエッセイの作成、スピーチ原稿作成の手助けが含まれる。

(2) 日本語によるリテラシー活動に参加することにおいて、主に以下の2つの動機が確認された。第一に、日本語学習の促進、第二に娯楽である。娯楽に関しては、日本文化に

対する学生の興味と密接に関係していた。学習と娯楽という動機は相互に影響し合い、リテラシー活動を促進しているという側面も一部に見られたが、ほとんどの参加者にとって、特定のメディアやトピックへの一時的な興味が、日本語学習の動機よりも重要な役割を果たすことを示していた。活動の主な例は、日本のポップソングに代表されるポップカルチャーに関連したものである。ポップカルチャーは、長期にわたって興味を継続できることがわかり、日本語学習の動機づけとして有用であることが示されている。

その一方で、授業関連以外の、学習者の興味に基づいたトピックに関する活動において、理解が困難になり、リテラシー活動が制限されたり、阻害されたりしてしまうことが示された。たとえば、日本のポップカルチャーに関連する資料（マンガ、アニメのビデオ、バラエティ番組）に含まれる口語的な表現は、言語クラスや教科書では十分に扱われていないことが原因であると述べられている。

(3) 参加者は、教室外における目標言語による活動をサポートするために、辞書、グーグルおよびウィキペディアなどのオンラインツール、ピアアシスタント、L1 ならびに L2 双方による情報（ビデオの英語と日本語による字幕など）を含むさまざまな媒体の言語関連リソースを利用していた。特に、ウィキペディアは、授業内の課題、授業内での読書活動の準備、自発的な読書に利用されることが多かった。

### 3.4 まとめと考察

第7章では、本書のまとめを示すとともに、本書に示された研究内容の日本語教育における位置づけについて考察された。そして、本書に示された研究結果と考察が、外国語の文脈において目標言語の学習習得に貢献し得ることについて示唆されている。

本書では、特に、教室内と教室外の L2 学習およびリテラシー活動が不可分であることを明らかにしたことについて強調している。また、言語クラスおよび言語教師自身が、意識的に教室内と教室外のリテラシー活動を構築または強化することにより、学習者の自律学習を促進することができるということについて提案している。

## 4. 本書の意義と課題

以上で概説したように、本書で示されている研究は、従来のような日本語授業関連の課題のみ、あるいは、主体的な L2 の学習活動と使用の実態のみを検討した研究とは対照的に、教室内と教室外の活動実践を総合的に検討している点において非常に特徴的である。このことから、今後ますます多様になる学習形態とそれらの相乗効果について検討するにあたって、大変意義深いものであるといえよう。

筆者を含め、日本語教師の中には、これまで、教室内の学習と教室外の学習を二項対立的に、あるいは完全に切り離して論じられてきたことについて違和感を持つ者が少なくないことが推測されるが、本書で言及されていた教室内と教室外のリテラシー活動は、「内」と「外」で行きつ戻りつを繰り返して連携し、相互に効果的に作用し合って第二言語習得に貢献していくのだということがよくわかる。すなわち、本書は場面が異なる学習活動のつながりの重要性を認識することに役立つものであるということが出来る。

また、本書では、ICT使用の盛んなオーストラリアの学校教育現場を研究の文脈として、いるところから、ICTと言語教育に関して詳細に記述されている。これは、教育現場でICT活用が進んでいるとは言い難い日本で教育に従事している者にとっては、非常に興味深く、参考になるところが多いのではないか。

一方で、ICTに関連して、教師の意識と実践のあり方に関する記述も含まれていれば、さらに「教室内」と「教室外」という捉え方に関する議論が深まったのではないかという印象もある。もっとも、本書は、教室外リテラシー活動の実態調査を示したものであり、教師の意識に関する研究という扱いはされていない。しかしながら、リテラシー活動があまりうまくいかなかった場面で、教師からの適切な支援があれば、ICTの効果的な利用が促進されたかもしれないということに関しては、たしかに考察の中で言及されていた。教師が適切な支援を行うことができるようになるためには、まず自らがその支援の対象となるものを経験し、熟達していなければならない。つまり、ICTを使いこなすことができる教師でなければならないのである。本書には明示されていないが、実際のところ、本研究の問題の所在は、社会でICTが目覚ましい発展を遂げ、その発展が言語学習や文化理解に強く影響して学習の形態を大きく変化させているにもかかわらず、「教室」という文脈における日本語教育の多くの場面で、いまだに教師主導、教科書中心の教育活動が行われ、時代の変化に追いついていない、あるいは時代に対応しようとすらしていないという問題が残っていることへの懸念であるという捉え方もできるのではないか。このような状況は、海外の日本語教育に限ったことではなく、日本国内のさまざまな教育現場においても散見される。教育に従事する者たちは、特に時代の流れに敏感になるべきである。そして、自身の教育観および具体的な教育実践の方法について常に見直し、場合によっては抜本的な改革をする覚悟を持たなければならないだろう。

世界中の日本語学習者がインターネットを使用して、容易に日本語や日本社会、文化にアクセスできるようになり、その勢いが強まるばかりである今日、学習場面を限定的に、または個別に語る時代はとうに過ぎたといえよう。本書は、海外の日本語教育現場の現状がよくわかるだけでなく、国内外を問わず、今後多様化していく学習環境と言語教育のあり方について、示唆に富んだ一冊である。

(おくむら けいこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士後期課程)